

グローバル化時代の移民現象における 動機が多様化・複雑化・偶発化

——在日ヨーロッパ人移住者の経験から——

デブナール・ミロシュ

DEBNÁR Miloš

はじめに：問題の所在と本論の目的

グローバル化時代において、移民または国際移動は現代世界の変化を象徴する現象の1つになっている。こうした国境を超えたグローバルな人口移動の趨勢は世界を覆い尽くしており、日本社会もその例外ではない。実際、在日外国人人口は、2008年の経済ショック以降緩やかに減少しているものの、登録外国者数はコンスタントに200万人を超えている（法務省2013）。さらには、日本国籍を取得した者や日本国籍者との間に生まれた彼らの子孫も考慮すれば、その存在は日本社会において決して無視できるものではない。

これまで人口移動を引き起こすメカニズムについては、プッシュ・プルモデルのような経済的要因を重視する見方が支配的だった。すなわち「貧しい南」から「豊かな北」への合理的な移動として、グローバル化時代の国際人口移動は捉えられてきたのである。確かに今日、東欧から西欧へ、中米から北米へ、または東南・南アジアから湾岸諸国へ大量の労働者が移動し、彼らは移住先の社会の労働市場において周縁の領域に停滞することで多くの社会問題を引き起こしている。その意味では、経済的要因は現代世界の人口移動を規定している重要な力であることは間違いない。日本における移民研究もまた、グローバルな人口移動研究と同様、主として経済的な要因によって移動してきた移民像を描いてきた。そこではもちろん、

出入国の政策や移民を制度化し、維持させる媒介的システムなどの要因も吟味されている。しかしながら労働移民にしても、国際結婚して日本に渡るアジア系女性にしても、送出国と受入国の間に存在する経済的格差が彼ら彼女らに移動を決定させる主要な原動力として論じられてきた。

しかし21世紀に入り、経済的要因を主たる動機としない移動現象がより顕在化するようになった。それは、グローバル化時代特有の価値観やライフスタイルの変化、そしてそれらの複雑化と多様化を背景にして生起しているようだ。こうした変化に伴い、この異質な移民現象に焦点をあわせる研究も出現してきた。例えば、ラッセル・キングはヨーロッパにおける移動の変化に着目し、1989年以降の経済的・政治的な世界の構造変動が新しい移民パターンをもたらしたと主張し、そういった実態が今までの移民現象モデルに強く異議を申し立てていると訴えた（King 2002）。具体的に、彼が注目したのは、人に移動を決意させる動機が多様化であり、その様相を「恋愛」、「環境優先」や「学生移動」といった「個人的事情」を含む「非伝統的な要因」と呼んだ。

こうした研究が主張しているのは、「伝統的な」経済的要因に基づく移民動機論の枠組みを超えた、より複雑で錯綜した特徴を有する移民の存在とその可能性である。こうした傾向は、日本から海外への移住現象の中にも見出すことができる。現代における日本人移民像はすでに、経済的なチ

チャンス求めて海外に移住する姿から、新しい生き方を求めて移住する「ライフスタイル移民」(佐藤 1993) や、西洋の文化世界への憧憬から生活拠点を移動する「文化移民」(藤田 2008) へと転換を遂げてきたという指摘は多くなされてきた(例えば Yamashita 2008 等)。

本研究では、こうした現代世界における新しい移民現象が、日本に流入してくる移民の中でどのように立ち現れ、それがどのような意味をもっているのかについて検討を試みる。そのための事例として、本研究は在日ヨーロッパ人の移民に焦点をあて、彼らの移民経験のなかに見出される、非経済的で複雑かつ多様な移動メカニズムを分析することを目指す。さらにこのような分析を通して、彼らの移動動機の中で偶発的かつ個人的な要素が決定的に重要な役割を果たしてきたことを明らかにしていきたい。それにより、グローバル化時代の国際移動のなかにも、経済的・非経済的という平板な二分法を越えた、偶発性をキーワードとする、グローバル化時代の新しい移動様式を見出すことが可能になるだろう。

1. グローバル化時代の人口移動： 先行研究の整理と本論の位置づけ

日本では、これまでアジア、南米などいわゆるグローバル・サウスからの移民が歴史的にも重要な役割を果たしてきたが、実はグローバル・ノースからの移民もこの 20 数年間で急増している。グローバル・ノースを欧州諸国、北米と豪州に限定してみれば、それらの滞日登録者数は 1980 年代後半から 2 倍以上まで増加し、2012 年現在には約 13 万人に上る(法務省 2013)。こうした急増にもかかわらず、この現象に注目する研究はほとんど蓄積されてこなかった。彼らの移民パターンは高熟練労働と想定されているが、そのパターンに関する実証的な研究はまだ少数にとどまって

いる(例えば Komisarof 2012 を参照)。

現代日本社会におけるノースとサウスからの移民現象を、単なる熟練対非熟練労働者の移動ととらえる従来の二分法的図式を超えて捉えることはできないだろうか。ラッセルが指摘したように、「非伝統的」な移民パターンに注目して、この現象をみることは、グローバル化時代の日本社会の新しい移民現象を理解するうえで意味があるだろう。

非経済的移動要因として、多くの先行研究が指摘してきたのは恋愛とライフスタイル志向である。恋愛は、グローバル化時代の新しい移動パターンとして重要な要因とされ、これまでも経済主義的な古典的移民研究と対立的に論じられてきた(例えば Kofman 2004)。そして、経済的要因が相対的に弱い移動現象として、環境を優先する移民や、定年退職後の年金移民、あるいは季節移動や別荘の保有などを含むライフスタイル志向を背景にもつ移動パターンが指摘できるだろう(Benson and O'Reilly 2009; 佐藤 1993)。恋愛やライフスタイルといった要因以外にも、必ずしも経済的要因によって説明しきれない国際移動動機として、高等教育に注目する研究もある(例えば Findlay et al. 2005)。この分野は最近日本でも出現しはじめている(例えば坪谷 2008)。

こうした新しい非経済的動機による国際移動パターンを取り上げる研究には 2 つの特徴が見られる。まずは、幅広いライフスタイル移民の場合においても、学生の国際移動の場合においても、移動者の文化資本とハビトゥスの重要性が指摘される点である。例えば、フィンドライらは留学先を選ぶ学生の動機の中に「移民の種」を見出し、その種蒔きの役割を果たしのが、差異化と階級再生産を推進する中産階級のハビトゥスだと指摘した(Findlay et al. 2006: 294)。また、スコットは多様化していく熟練労働者の移民の場合、中産階級

の再生産において伝統的な差異化の手段であった中等高等教育がその影響力を失う一方で、国際移動による新たな文化資本獲得が中心的な要素になりつつあると主張した（Scott 2006：1107）。つまり、彼らは移民現象を幅広い意味での中産階級の自己生成運動と関連付け、経済格差という主な動因よりも政治、文化、社会的に複雑な要因の複合的作用の結果として国際移動の動機を描いているのである。

このような研究のもう1つの特徴としては、複合的な移民動機が形成される過程を、その現象が生起する社会の深層構造と連動させようとする視点が挙げられる。その1例として、現代社会の個人化の傾向が「移動の文化」を形成しているという見方がある。ベック（Beck and Beck-Gernsheim 2002）など、個人化の社会理論の提唱者によれば、現代社会における諸個人の行動は、単純に伝統的な動機に帰因させて理解できるものではなく、よりポストモダン的な人間観（社会観）につながっているとされる。つまり、社会の個人化が進行すると、移動は「（より高い賃金を求めるというような）伝統的な経済的要因よりも、経験的（かつ創発的）な目的によって動機づけられている」（Findlay et al. 2005：193）というのである。たとえばギデンスが提示した主体像のシフト、すなわち伝統的な社会構造によって形成される主体から再帰的プロジェクトの過程として生をとらえる理解へのシフト、もこうした議論の文脈にそったものであった（Giddens 1991=2005）。

このようなグローバル化時代の新しい移動パターンは、日本から海外に向かう移動現象の中にも確認できる。ここではライフスタイルと文化的要因が重要な役割をはしていることが指摘されている（例えば藤田 2008）。日本の場合には特に、社会におけるジェンダー不平等、キャリア設計における逸脱的展開への厳しい規制や、日本社会の中に

定着してきた西洋文化への憧れなどがその移動の背景にあるとされてきた（Kelsky 2001）。しかし、海外からの現代日本社会に移動してくる移入民については、こうした新しい移動パターンに関する実態は十分に検討されてきていない。グローバル化時代の世界において、日本は1つの文化的大国として認められており、その意味では、ライフスタイルや文化的要因を主とする移入者の目的候補地になり得るが、これまで日本への移入者は基本的に労働移民として把握されてきた。確かに、労働移民以外にも、国際結婚のための移民、学生の移動や高熟練労働移民も注目され始めているものの、ここではグローバル・サウス（特にアジア）からの移民が主たる対象となっているケースがほとんどであった。もちろん、このような研究も重要ではあるが、現代日本社会における移民現象の多様化を総体として把握するためには、グローバル・ノースからの移動を含む移動現象の実態とメカニズムを考察する必要があるだろう。

筆者は以前、在日チェコ人とスロバキア人の事例を取り上げ、彼らの移民パターンは必ずしも経済的要因に基づいているものではないことを指摘したが（デブナール 2012）、そのような移民動機を形成する諸要因を検討し、グローバル時代の移民現象理解の議論の中でより理論的に展開することができなかった。そこで、本論では、在日ヨーロッパ人を題材にして、「非伝統的」な移民パターンの可能性を具体的に検証しながら、そのパターンが意味するものを解明することを試みる。つまり、「文化」や「ライフスタイル」要因を重視して移動する在日外国人の経験を詳細に取り上げ、その経験がどのような社会的経済的要因によって産出されているかを検討することが本研究の目的である。

2. 現代日本社会におけるヨーロッパ人移住者：事例紹介

ヨーロッパから日本への人の移動は歴史的にみると新しい現象ではなく、16世紀まで遡ることができる。特に明治時代に来日したお雇い外国人の多くがヨーロッパ人であり、その存在はよく知られているだろう。だが、戦後日本は多くのヨーロッパ人にとって、地理的にも文化的にも遠い国であり、実際に渡航しにくい国でもあった。その傾向は、例えば在日ヨーロッパ人の数から覗うことができる。国勢調査のデータによると、1930年には日本で11000人以上のヨーロッパ人が在留していた（内閣統計局1935）が、80年代後半になってもその2倍程度にしか増加していない。

しかし、こうした状況は、1990年代に入ってから大きな変化を遂げた。図1が示しているように、2009年までの約20年間で在日ヨーロッパ人の人口は実に約3倍まで急増したり。2008年にピークを迎えた後、緩やかに減少し始め、東日本大震災及び福島原発問題が起こった2011年からは目に見えて減少している。それにもかかわらず、南米からの移住者のような急激な減少は見られず、2012年現在も6万人近くのヨーロッパ人が日本に滞在している（法務省2013）。しかし、後

述する旧ソ連系女性のケーススタディーを除けば、なぜより多くのヨーロッパ人が日本へ移動し滞在するようになったかを説明できるような研究はほとんどなされていない。

また、図1が示唆しているように、在日ヨーロッパ人の構成は徐々に多様化してきていることもわかる。西欧諸国出身者は80年代後半に約80%を占めていたが、冷戦構造崩壊後の旧社会主義圏諸国や南西欧からの移民増加によってその割合がおおよそ20%も減少した。現在は、15000人を超えているイギリス人を筆頭に、フランス人とロシア人の在留者がつづいている。図1が示している在日ヨーロッパ人の急増と多様化は、国際移動の多様化・複雑化を検討する本研究の問題意識の背景を端的に示している。

2.1 データ

本研究が用いるデータとしては、46人の滞日ヨーロッパ人に対するインタビュー調査の結果を使用する。この調査は、主に関西と関東に在住するヨーロッパ系滞日者を対象にし、2011年7月から2012年10月の間に著者が実施した。基本的に1人につき最低1回のインタビューを実施し、1回当たり平均で70分の半構造化インタビューを行った。主な課題としては、移動の経緯、動機

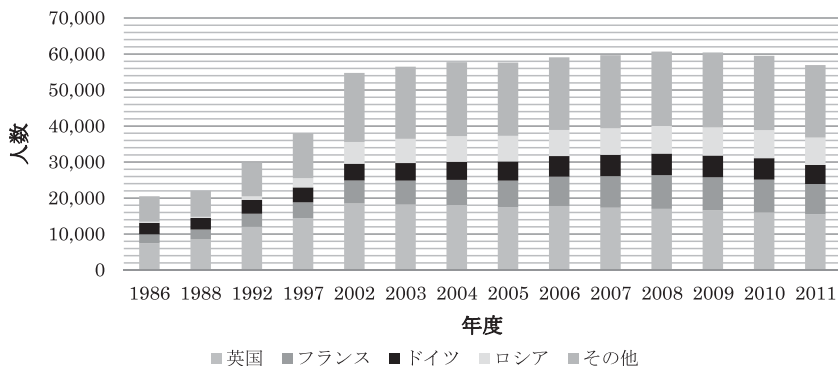


図1 在日ヨーロッパ人の推移 (1986年～2011年)

出典：『在留外国人統計』（法務省）より作成

表1 インタビュー対象者の属性

		度数
出身国数：		22
地域：	西欧 中欧 北欧 東欧 南西欧 南東欧	10 8 6 8 8 6
性別：	男性 女性	27 19
在留資格：	身分(日本人の配偶者、永住者等) 留学 研究・教授 人文知識・国際業務 他の専門・技術職 その他	25 8 3 3 5 2
年齢：	22才～29才 30才～39才 40才～49才 50才以上	7 28 7 4
滞日期間：	1年未満 1年～3年未満 3年～5年未満 5年～10年未満 10年以上	1 2 12 15 16
職業：	語学教師 大学教員 その他の専門・技術職 無職・退職 学生・研究員 その他	12 5 9 4 10 6

と日本での生活に関する意識が中心だった。また、基本的に対象者をスノーボール式で選択したが、この方法によるバイアスを少しでも緩和させ、多様なサンプルが得られるよう、複数のアクセス・ポイントから対象者にアプローチし、対象者自体を国あるいは地域、在留資格や性別を考慮して選抜した。

対象者の主な特徴を示したのが表1である。30代またはそれ以上、そして5年以上の長期滞在者が3分の2を占めている。複数の渡日経験を持つ対象者は36人で過半数を占め、日本人配偶者をもつ対象者は25人であった。国籍に関してはイギリスが5人、ウクライナとイタリアが4人ずつ

で一番多く、それ以外の国籍者は1人から3人とどまった。

最終学歴は対象者の選択基準ではなかったが、2つのケースを除けば、全員が大学以上の高等教育歴を持っていた。職業に関しては、外国語教師(特に英語)または外国語を利用する職務が一番多く見られた。このような職業は専門・技術職外国人というカテゴリーでまとめることができるが、外国の文化を資源とする職業として専門・技術職とは、性格が異なるという指摘もある(塚崎2008)。また、就労形態に関しては、対象者のうち正社員は12人のみであり、残りは滞在期間、在留資格や性別に関係なく非正規雇用または自営であった。つまり、出身、学歴や職業分類からみると、一見エリート層に見える彼らだが、実際の職業や就労形態からみると、異なる像が浮かび上がってくるのがわかる。

3. グローバル化の進展と日本への移住パターンの多様化

図1が示している在日ヨーロッパ人の急増と多様化は、いったいどのように説明することができるだろうか。第一に指摘できるのは、現代日本社会への他の移入民と同様、その背景にグローバル化の影響力を見出すことができる点だろう。特に1990年代後半から、旧社会主義圏の国々の一部においては、興行ビザの制度が日本の労働市場への「裏口」の役割を果たしてきた。それまで女性エンターテイナーとしての地位を「独占」してきたフィリピンからの移住者とは別に、数多くのロシア人やルーマニア人が高い賃金を求めて渡日してきた。そのことは、各国の女性割合と配偶者ビザ保有者の割合(法務省2013年)から容易に推測することができる。そして、興行ビザ発行が厳重になった2004年以降には、その女性の多くが日本人男性と婚姻関係を結び、在日ヨーロッパ人

人口の増加と定住化に貢献したと考えられる。

3.1 経済的要因と合理的選択

無論、経済的要因は女性エンターテイナーに限っているわけではない。実は、日本と比較的に同等な賃金が得られる西欧諸国からの移住者の中でも、移動した背景に日本に経済的利潤を追求するケースもある。まずは、高学歴化や経済停滞・不況によって多くの西欧諸国でも就職競争が激しくなり、国際移動はよりいい「チャンス」を求める1つの手段になりうる。そこで、場合によって仕事を日本のような外国でする方がより高い社会的地位、または経済的にもよりよいチャンスを意味する場合もある。例えば、大卒であっても母国において外国人に英語を教える仕事しか見つからなく、そのような仕事に日本で従事した方がよいというイギリス人のポール（男性、45歳）がそのような事例であると考えられる。

また、高熟練労働者にとって受入制度が整えていながらも日本の労働市場には文化的・構造的な障害が未だ大きいと指摘されてきたが（Oishi 2012）、本調査ではそういった枠で移動するフェリパ（スペイン、女性、34才）とグレータ（デンマーク、女性、40才）のような^{expatriates}駐在員や日本の経済的ポテンシャルに魅了され、日本で就職してから起業を求めるロシア人のアナトリ（男性、33才）のケースもあった。そして、日本での留学と研究が比較的に高い研究・教育環境を持つと同時に、優遇な奨学金や研究員制度も提供できることが経済的な移動動機の1つとして考えられる。もちろん、留学等の場合には日本での経験が実際に他国でどの程度有効な人的資本になりうるか、つまりその資本転移可能性（capital transferability）を吟味する必要があるが、特に賃金や生活水準が比較的に低い東欧諸国の場合には、マケドニア人のボヤンが主張しているように文部科学省の奨学

金制度が「大金」になり、経済的な意味でも留学が母国での就活以上の生活水準を提供できるように見えるケースもいた。

しかし、上記の数例以外の対象者に関しては、このような明確な経済的かつ伝統的な移動動機を持つ対象者がほとんどなく、むしろこのような単純な合理的選択と反対する語りが多いことがわかった。また、上述の事例においても、文化的にも地理的にも遠い日本がなぜ合理的な選択になりうるかを追及する必要があるだろう。つまり、「英語を教える」や「先進国なりのビジネスのポテンシャル」のような機会を提供する国々、すなわち移動のコストからみればより「安い」国・行先が多数あったにも関わらず、わざわざ日本を選択した行為を理解・解明するには経済的要因以外の移動動機に着眼する必要があるだろう。先述したように、本研究が着目するのは、こうした伝統的移動パターン以外の多種多様な移動メカニズムである。グローバル化の中で、彼らはなぜ日本への移動を決定し、どのようにして来日をはたしたのだろうか。このような疑問を解明することは、グローバル化がもたらしている、国際移動現象の複雑性と多様性のより包括的な理解の上でも重要だといえる。そこで、以下では日本への移民パターンと移動動機を手がかりにして彼らの生の軌跡を検討することにしよう。

3.2 日本への憧れと国際交流

本調査の対象者の移動動機を整理すれば、いくつかの要因が複雑にからみあっている様子がかげがかる。その諸要因を解きほぐすとすれば、最初は、日本および日本文化への憧れという意識が指摘できる。もちろんそれは19世紀中葉のジャポニズム以来、歴史的・政治的に構築された表象の産物であることは間違いない。しかしながらジャポニズム以来の長い歴史を持つ文化的「眼差し」

に加え、この数十年で見られる日本の世界的プレゼンスの高まり（例えば岩渕 2001）から、日本イメージはヨーロッパの若者の日常文化の中に定着しつつある。その結果、本研究の対象者の半数以上の場合には、武道や茶道、言語や社会のような日本文化一般に関する興味が彼らの移動動機に強い影響を及ぼしていたことがわかった。このような「伝統的」な日本文化をその産地で学習・修行することには、他では得られない付加価値があり、それが動機決定に強く作用している。

例えば、ギリシャ人のステファノス（41 才、男性）が始めて来日した時には大学で情報学を専攻にしていたが、高校時代から合気道の稽古を受けていたことが、更なる日本への関心と渡日の決心に繋がったと語る。

（合気道を）やればやるほどそれ（日本）に興味を持った。次の年から日本語の勉強も始めた。勉強を始めてから 2 年目に、日本語の学生を対象にした小規模な交換プログラムがあって、京都で 1 ヶ月滞在することができた。それで分かった。（日本で）住みたいということね。ギリシャに戻ってから色々調べてみた。日本の文部省の留学生奨学金制度を知って、それは特に情報工学の学生だったらかなり取りやすそうだった…（それで日本の）大学に入学した。

彼は日本で大学を卒業してから日本の企業に就職し、日本人と再婚した²⁾。彼が来日してから 15 年が経つ。この事例が示しているのは、合気道のような文化的趣味が長期的な日本滞在に繋がる回路であるが、そこではグローバル時代が進んでいる中で増加する国際交流・交換のようなプログラムが大きな役割を果たしていることが分かる。それは政府が主導する大規模なプログラムだけではなく、ステファノスが実際に利用した小規模で

インフォーマルなプログラムも、国際交流の増加と組織化に大きな役割を果たしている。彼の事例が示しているように、期間限定の小さなプログラムであっても定住化のポテンシャルを持っているのである。そこで重要なのは「移動資本」(mobility capital) の取得である。スコットとカートレッジによれば、国際移動で獲得できる移動資本は、語学能力の発達やより開放的な社会ネットワークとアイデンティティの構築によって更なる移動の可能性を生み出すと同時に、外国の社会への統合も促す (Scott and Cartledge 2009: 76)。

交流プログラム以外にも、同様の役割を果たしている渡日手段がある。たとえばワーキング・ホリデーやバックパッキングが日本社会・文化との最初の個人的な出会いとなり、それが長期滞在の決定に繋がったという事例も少なくなかった。もちろん、このような入国手段は、一般的に多くの若者に日本へ行く機会を提供している。例えば、事前に日本にまったく興味を持っていなくても、世界一周バックパック旅行をしていたイギリス人 2 人の事例や、ワーキング・ホリデーを利用したフランス人 (39 才、男性) が日本を訪れ、ここでの生活を気に入ったことから滞在が長期化・定住化したという例もあった。このような場合でも、日本での生活を「試してみる」という機会、あるいはこのような機会が提供する移動資本は重要である。つまり、更なる移動を促す可能性を持つ移動資本は、上述した対象者の場合のように、外国の社会に滞在あるいは居住する経験が、実は移動を定住へ置き換える可能性も孕んでいることを移動性を考えるさいに留意しなければならない点を強調する概念である。

また、このような入国手段と日本滞在パターンが示唆しているのは、労働市場の統合と自由化を中心とした経済的・政治的グローバル化の影響だけではなく、より広い意味での、または場合によっ

ては「下から」のグローバル化による移民の増加だろう。

3.3 大学教育と研究のグローバル化

上記の事例が示唆しているのは、留学がヨーロッパ諸国からの日本移住への重要な「入り口」の1つとなっていることである。実際、本調査では、日本での留学や研究という経験を持った対象者が26人もおり、日本移住の主要な要因の1つとなっている。留学生の増加は、1980年代後半から日本政府が掲げる国際化の大目標であり、主要大学において受け入れ制度、奨学金制度や外国大学との協定・交換制度が著しく発展してきた。その結果、留学生は大学または教育全般の国際化ないしグローバル化に貢献してきただけでなく、入国手段と同時に日本滞在の長期化にも繋がっていることが中国人留学生のケースで論じられてきた(坪谷 2008; 鈴木 2011)。

本調査では、10人の現役留学生あるいは研究生以外に、現在は異なる在留資格や職業を持って日本に滞在していたり、卒業後、いったん帰国しながら再び日本に戻ったりした回答者の数は16人にもものぼる。このような定住化の背景にある1つの要因として、留学時の長期滞在があると考えられる。日本学生支援機構の調査結果³⁾によると、ヨーロッパ系留学生のほぼ6割が1年間以上の長期留学をしていた。滞在の長期化の結果、日本社会の中の多種多様なネットワークに埋め込まれ半定着化することで、逆に帰国することが難しくなるケースも少なくなかった。そのような事例の経験を、大学から大学院まで日本で勉強してきたルーマニア人のコルネリウさん(34才、男性)が次のように語っている。

海外で教員として就職することは無理だ…フランスやドイツのような、競争の高い国では他の

人たちもあなたと同様にいっぱい投稿論文を持っているし、その上そこで知名度のある先生たちにサポートされている

このような半定着化も移動資本の獲得によるものであると考えられ、日本での留学、とりわけ学位取得を伴う長期留学は、日本での就職の可能性を増幅させると同時に他国での就職可能性を減少させるパターンも多様な移動パターンの1つの帰結である。さらに、このような事例が示唆しているのは、留学を移民として取り上げる視点が必要だということである。坪谷が在日中国人留学生のケースで指摘したように、「ソジョナー(一時滞在者)」とみなされている留学生の滞在が「永続化」していく傾向(坪谷 2008)については、在日ヨーロッパ人の場合にも見出すことができる。その一方で、日本での就職が困難で現在日本での在留資格を失う間近であるコルネリウさんの事例が示唆しているのは、中国人留学生がよく採用される文化的本資本を活かす職業(Liu-Farrer 2009)以外の可能性⁴⁾がまだ限定されており、こういった多様な移動パターンが日本の労働市場あるいは社会へ十分に統合させられていないと同時に、留学生が他国でも日本でも就職困難に直面している問題である。

しかし、移動パターンを説明する上には、そもそもヨーロッパ系留学生はなぜ日本での留学を選択したのだろうか。本調査の結果からは、ステファノスのように日本文化への憧れを理由にしたり、高等教育のグローバル化によって組織化(ネットワーク化)された繋がりを活用したりして移民回路が形成されるという、ある意味で当然かつ明確なパターン以外に、もう1つ興味深いパターンが確認できた。前述のコルネリウもこのようなパターンの実践者の1人である。彼は事前に日本に関して強い関心を持っていたわけでもないし、

自分が当時所属していた組織との関係をベースにして誰かから日本での留学を進められたとか、またはそのような関係によって「踏み固められた」道⁵⁾を歩んできたわけでもない。彼は単に留学に興味を持ち、偶然に日本で留学の機会を見つけたという。

僕の場合はただの偶然だった…そういうふうになっちゃった。でたためて応募してみたけどよ…ただ試してみたけど受かっちゃった。いっぱい探してたとかそういうわけじゃない。

このような場合にも奨学金制度（特に文部科学省）の存在が大きな役割を果たしているため、組織的な移民という側面もあるが、留学への興味によってたまたま渡日したところが本事例の興味深い特徴である。「僕は特定の国を目指してたわけじゃない」と彼が強調しているように、日本は意識的かつ合理的な選択だったというよりもたまたま巡り合ったチャンスを利用しただけであり、彼にとってはチャンスがあれば日本以外でもまったく問題なかったはずだ。こうした移住動機は他のケースでも見られる。「たまたま巡り合ったチャンス」というのは具体的に何を指すのかといえ、例えば「新聞で（奨学金の）広告を見た」というような非必然的選択をイメージするのがわかりやすいだろうし、日本に関心を持った対象者の中で「家の本棚に日本の古事記が置いてあった」というきっかけもそれを意味すると言えるだろう。

もちろん偶発性を強調するさいにも、フィンドライらが指摘したように、この留学あるいは国際移動への志向は「移民の種」であり、それらが実は中産階級のハビトゥスと差異化の態度によって構築された（Findlay et al. 2005）ということ留意しなければならぬ。しかしながら、「移民の

種」が人々の中に埋め込まれる一方、移動を実践する人の数は圧倒的に極小である。このズレを説明するためには、フィンドライらが指摘した「移動性のネットワーク」（つまり組織化された移民の側面）だけでは十分ではない。それに加えて、本事例も示している偶発的な要素にも注目する必要がある。当然、偶発性はグローバル化の進展による複雑性の帰結ではあるものの、個人の属性や諸資本の所有形態からだけでは導き出すことはできない。そして、諸資本と個人の所属だけに左右されていないこの偶発的な性質があるからこそ、人々の動機が非経済的なものになる可能性が出現すると考えられる。言い換えれば、経済的要因によって動かされる移民、または留学生のように組織的な側面に注目してきた従来の見方に加えて、そこに個人の偶発的・非必然的選択という視角を検討してみることが今日の国際移動現象を読み解くうえで重要だということだ。

3.4 国際結婚

最後に取り上げる移民動機は国際結婚である。これまで国際結婚は、日本農村における東南アジアからの花嫁移入に代表されるように、グローバルな経済的要因の中で議論されてきた。しかし国際結婚においても、非経済的要因という視点で検討することは重要である。

今回の回答者の中にも、ステファノスのように、渡日してから日本人と結婚するケースが存在している。この場合には、日本人との結婚は移民の動機とは関係を持たないが、日本社会での定住化を促進する1つの要因となっている。しかし、日本人と海外で知り合い婚姻あるいはパートナー関係を結んでから日本への移動・移住するパターンもあり、この場合には結婚が移動動機と直接関係していることが多い。そうした事例の1つとして、チェコ人のルカス（35才、男性）の事例を

検討してみよう。

ルカスが現在の日本人の配偶者と初めて出会ったのは南アフリカだった。2人とも南アに語学留学にきており、留学生同士の交流の場で知り合った。このように、どちらか一方の出身国ではなく、第三国で日本人のパートナーと出会うのは、今回の回答者の中でも多くみられ、現代移民の広域な側面の1つを表している。特に日本人女性がよく語学留学やワーキング・ホリデーあるいはライフスタイル移住の目的地として選ぶ豪州、北米と英国が出会いの場となったようだ。

しかし、ルカスの事例は現代移民の広域な側面だけでなく、さらに複雑性を浮き彫りにしている。南アでの2人は友人関係にとどまり、彼女が南アを離れ中欧で留学してから、2人の交際は始まった。つまり、彼らが交際に至るためには、2回の異なる国際移動が必要であった。彼女は当時オーストリアの音楽大学に留学していたが、チェコなどの隣国を訪問する際に、南アフリカの留学仲間であったルカスに案内を頼んだのが交際のきっかけだった。そして、留学を終えるころから、2人は共同生活を営むための場所を話し合った。ルカスにとっては自分の専門（IT）を活かして就職できるチェコが最も合理的な選択だったが、2人がともに働くことができる英語圏の国も考慮した。そこで、ルカスはまず単独でニュージーランドに渡った。しかし、就職またはキャリアのチャンスはあったのだが、その環境は気に入らなかったとルカスが語る。

だけど、そこはあまり好きじゃなかった。特に、僕は自然やハイキングが好きだけど、ニュージーランドで自然に出かけたかったら、実際に入場料がかかる国立公園に行くしかない。残りは柵で仕切られてて、羊がいっぱいいるから人は柵に制限されている。(……) その上に、

特に南の島には日差しが本当に強いから、外出する時に日焼け止めを塗らないといけない。

こうしたきわめて個人的で「些末」な理由でニュージーランドは候補から消えた。ルカスは、2007年に日本にたまたま帰国していた彼女を訪れるために訪日する。当初（2007年）は短期滞在の予定だったが、それが現在に至りそのまま定住してしまった。この決断に至った経緯を説明する中で、彼はニュージーランドと対照的に現在の場所を描き、その重要性を強調する。「山、温泉と海」がすべて現在住んでいる町にあるから、その場所を「すごく気に入った」という。また、彼女の家族が持っている古い日本家屋も非常に魅力的であり、そこで住みながら2人で民宿を営むことにした。当初念頭にあったような専門性を活かした就職の可能性は放棄し、不安定でありながらも魅力的な自然環境の中で住む決定をくだしたのである。

彼の移動動機の語りは、もちろん現在の生活様式によって（再）解釈・正当化されている側面もあるが、ここで重要なのは、キャリアやより高い賃金という合理的で経済的な移住動機の欠如である。この場合にもより決定的だったのは、相手の存在や自然環境という、「非伝統的」な、個人的で偶発的な移動動機であった。このような傾向は国際結婚にとどまらず、他の事例においても見られるが、これらの経済的な動機の強調をしない語りは以下の2つのことを示唆していると考えられる。第1に、このような語りは、日本での生活においてキャリアなどが十分に達成・発展できない実態を、乗り越えるための言説として活用されるということだ。つまり、グローバル・ノースに出自をもつ、または「ホワイト」であるという、普段は有利をもたらすと思われる要素が、日本社会の労働市場において相対化されていることを

示唆している。具体的には、「欧米人」、すなわち「ホワイト」として日本で就きやすい職業が存在していることが彼らの就業先から分かる。その中では、言語、特に英語、や一般的に自分の文化を商品化する職業が多かった。もちろん彼ら自身がこうした日本社会における「ホワイト」イメージと英語あるいは（西欧）文化「崇拜」を利用して意識的にこのようなニッチに居場所を求めるところもあるのだが、多くは日本社会に定着した「ステレオタイプ」によって自らのキャリアコースを否定されたり歪められたりして、「隙間」に追いやられたのである。確かに例えば英語講師などは、周縁的かつ限定的でありながらも、経済的に日本における生活を可能にするし、社会的地位も必ずしも低いわけではない。その結果、ルカスの事例も示唆しているように、自分が本来望んでいるキャリアコースとは別のものであっても、日本での生活基盤の確保を優先する人も現れると考えられるだろう。

上記の語り示唆するもう1つの点は、より直接的なもので、ライスタイルや日本文化への憧れといった非経済的要因が移動に関する個人的判断に大きく作用しているということだろう。ルカスの語りはそのことをよく表している。この点をより深く検討するためには、社会の個人化について考察する必要がある。これまで論じられてきた移動に関する「社会の個人化」の作用とは、人々に自分の人生は自分自身で選択できると信じ込ませる効果と、こうした個人的選択の合理的な必然性であった（例えば、Benson and O'Reilly 2009；Kawashima 2010）。しかし本研究のいくつかの事例が端的に示しているように、諸個人がぐだした移動の決定は、キャリア形成や上昇移動という目的と連動した合理的選択ではなく、より偶発的で「流動的」（Bauman 2001=2008）な質をもっている。そのような傾向は、ルカスがチェコでの生活

を振り返って語るところからも読み取ることができる。

（チェコ在住当時の）僕のアイデアー僕の両親のアイデアは（チェコ国内）でキャリアアップして、プラハでマンションか住宅を買って両親の近くに住むことだった。これは（私は卒業してから）4年間やってきたことだった。コンセプトをもって、会社で何とか昇進して、プラハの近くに土地も購入した。

彼が強調しているのは、かつての自分や両親が想定していた国民国家の領域内に閉じた「安定」した（近代市民）生活に対して、彼がその後歩み始めたコースは、きわめて「流動的」なものだったという点である。その流動性の背景にはもう1つの事実が潜んでいた。バウマンが喝破したように、現代社会における個人化は、「近代という時代の到来以来、人間につきまってきた『アイデンティティの問題』は、その姿と内実を変化させた」（Bauman 2001=2008：201）。具体的には、「『どうやってそこまで行くか』という問題から（……）『私はどこに行けるのか、あるいは行くべきなのか。そして私がとったこの道はどこへと続いているのか』」（同書）という問題への転換が生じたのである。つまり、個人はある目的へたどり着く手段だけではなく、その目的自体も自分で探求し、決定しなければならない。かつてその目的を決定していた諸要素・諸構造の内実的かつ継続的变化により、目的自体が「流動的」な過程へと変化しつつあるのだ。

このような社会的状況が個人の移動決定に及ぼす影響の帰結は、これまでの経済的利得を合理的に計算して判断するというモデル（母国における中産階級の再生産に繋がる「安定でいい仕事」に就く）から、「未定」の道を歩むという個人的か

つ偶発的選択を可能にするモデルへの移行である。つまり、社会の個人化は、人々に絶え間なく続く選択による差異化を推し進めるが、その差異化の目的自体も変化させ流動化させる。現代社会の多くの場面で見られる非物質的価値観へのシフト、または絶対的なものからより寛容なものへと価値観と規範が移行する中（Inglehart and Baker 2000）では、「キャリアよりライフスタイル」という選択は、より受容可能で、時代に適合した選択として意味づけられるようになった。換言すれば、移民現象に関する社会の個人化の影響は、階級再生産と上昇移動につながる差異化を促進させるだけではなく、そういった枠組み自体を変容させることによって移民のさらなる多様化・複雑化を促しているのである。

4. むすびに代えて

本論では、在日ヨーロッパ人を事例にしながら、今まで十分に検討されてこなかった国際移動のパターンの多様な様相を考察してきた。とりわけ、経済的動機が移住の決定的な要因になっていない移動パターンに注目し、その意味の解明を試みた。個人的で多様な非経済的動機による国際移動のパターンが急激に増加するのは、グローバル化の影響に加え、社会の個人化と中産階級の差異化戦略の作用であった。こうした作用が個人に及ぼす影響と移動性との関係について考察した。そこでわかったことは、多くの人々が人生を選択可能な「再帰的プロジェクト」（Giddens 1991 = 2005）とみなし、多様な移動メカニズムを作り上げていること、また従来の経済的利得を合理的に計算して移動するという移住モデルとは別の次元で、様々な生き方を可能にしているという点であった。社会の個人化が促進させている流動性の増大によって、移住メカニズムにおける非経済化の側面、すなわちキャリア構築や経済的利得を重視

せず、文化やライフスタイルなどの個々人の生の価値を優先させる生き方が強化され、それに基づいた移動・移住が展開されるようになってきたのである。こうした新しい移動パターンは、現代世界における社会変動と繋がる創造的な選択になりつつある。

この個人化された移動メカニズムの中で、さらに重要な役割を果たしている要因として本研究が強調したのが移動決定における偶発性の効果であった。グローバル化の進行による複雑性の増大と社会の個人化の進展を背景にし、偶発的な移動機会の多発とそれを受け入れる個人の増加によって、より偶発的な動機による移民の出現が可能になった。グローバル化が多次元的に進む中、日常生活における複雑性も増し、それによって諸個人の属性や社会の構造要因からだけでは説明できない偶発的な移住契機が発生し、その偶発的な出来事を思い切って受け入れられる個人は社会の個人化によって後押しされ、移動という決定を導く人々が増加する。本稿は、より個人化、多様で偶発的な国際移動の機制を明らかにした。これは、まず、諸構造と個人の属性に規定された必然的な帰結として国際移動を描くのではなく、移住先を決定する際の諸個人の偶発的選択過程に注目するものであった。そして、これは従来の集合的な移民像（cf. Castles, Miller 2009 = 2011）とも大きく対立し、範列的かつ個人的な移民理解になるだろう。

〔注〕

- 1) 法務省の在留外国人統計から計算すると、日本在留外国人の総人口が1988年と2010年の間に2.3倍ぐらい増加したのに比べて、ヨーロッパ人人口が同じ期間において2.8倍も増加してきた。
- 2) ステファノスはギリシャでも結婚していたが、日本滞在が長期化する中で離婚を選び、その後日本人と再婚した。
- 3) http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.

html, 2012年7月19日にアクセス。

- 4) コルネリウさんは日本の名門大学で工学の博士号を取得しているが、研究者・教員としても、技術者としても就職と再就職の際に非常に苦労したと語っていた。
- 5) ここでは、特に所属するヨーロッパの大学や研究機関と日本の組織の間に存在する厳密な関係（つ

まり、交換留学の協定など）の中で移動することを指す。例えば、本調査の対象者の中では、ヨーロッパでの指導教員と受け入れ組織の教員の間に結ばれた交換留学制度や、ヨーロッパでの研究の一環として日本での短期留学という手段を利用する、強く組織化されたパターンの中で渡日するケースもあった。

〔参考文献〕

- Bauman, Zygmunt. 2001. *The Individualized Society*. Cambridge: Blackwell. (=2008, 澤井敦・菅野博・鈴木智訳, 『個人化社会』, 青弓社.)
- Beck, Ulrich, and Elisabeth Beck-Gernsheim. 2002. *Individualization*. London: Sage.
- Benson, Michaela, and Karen O'Reilly. 2009. "Migration and the Search for a Better Way of Life: A Critical Exploration of Lifestyle Migration." *The Sociological Review* 57(4): 608-25.
- Castles, Stephen & Mark J. Miller, 2009, *The age of migration*, 4th ed., Palgrave Macmillan. (=2011, 関根政美・関根薫監訳『国際移動の時代』名古屋大学出版会.)
- デブナール・ミロシュ, 2012, 「在日外国人の多様化と日本社会への参加－在日チェコ人とスロバキア人の事例から見えるもう一つの可能性」, 『ソシオロジ』第57号3巻, 頁37-53.
- Findlay, Allan M., Russell King, Alexandra Stam, and Enric Ruiz-Gelices. 2006. "Ever Reluctant Europeans: The Changing Geographies of UK Students Studying and Working Abroad." *European Urban and Regional Studies* 13(4): 291-318.
- Findlay, Allan M., Alexandra Stam, Russell King, and Enric Ruiz-Gelices. 2005. "International Opportunities: Searching for the Meaning of Student Migration." *Geographica Helvetica* 60(3): 192-200.
- 藤田結子, 2008, 『文化移民－越境する日本の若者とメディア』, 新潮社.
- Giddens, Anthony. 1991. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Cambridge: Polity Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, 『モダニティと自己アイデンティティ: 後期近代における自己と社会』, 青弓社.)
- 法務省入国管理局, 2013, 『在留外国人統計(平成25年版)』, 大蔵省印刷局.
- 岩淵功一, 2001, 『トランスナショナル・ジャパン』, 岩波書店.
- Inglehart, Ronald, and Wayne E. Baker. 2000. "Modernization, Cultural Change, and the Persistence of Traditional Values." *American Sociological Review* 65(1): 19-51.
- Kelsky, Karen. 2001. *Women on the verge: Japanese women, Western dreams*. Durham: Duke University Press.
- King, Russell. 2002. "Towards a New Map of European Migration." *International Journal of Population Geography* 8(2): 89-106.
- Kofman, Eleonore. 2004. "Family-Related Migration: A Critical Review of European Studies." *Journal of Ethnic and Migration Studies* 30(2): 243-62.
- Liu-Farrer, Gracia. 2009. "Educationally Channeled International Labor Mobility: Contemporary Student Migration from China to Japan." *International Migration Review* 43(1): 178-204.
- 内閣統計局編, 1935, 『国勢調査報告(昭和5年)』, 東京統計協会.
- Oishi, Nana. 2012. "The Limits of Immigration Policies: The Challenges of Highly Skilled Migration in Japan." *American Behavioral Scientist* 56(8): 1080-1100.
- 佐藤真知子, 1993, 『新・海外定住時代: オーストラリアの日本人』, 新潮社.
- Scott, Sam. 2006. "The Social Morphology of Skilled Migration: The Case of the British Middle Class in Paris." *Journal of Ethnic and Migration Studies* 32(7): 1105-29.
- Scott, Sam, and Kim H. Cartledge. 2009. "Migrant Assimilation in Europe: A Transnational Family Affair." *The International Migration Review* 43(1): 60.
- 鈴木洋子, 2011, 『日本における外国人留学生と留学生教育』, 春風社.

塚崎裕子, 2008, 『外国人専門職・技術職の雇用問題』, 明石書店.

坪谷美欧子, 2008, 『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティー—中国からの日本留学にみる国際移民システム』, 有信堂高文社.

Yamashita, Shinji. 2008. *Transnational Migration in East Asia*. Suita, Osaka: National Museum of Ethnology.